

「まだ終わりではない」

～2011年3月19日～6月8日 計10次の支援隊派遣に寄せて～

2011年3月11日、東日本大震災発生直後、3月15日、岩手の友人より支援要請があった。当時、岩手とようやく携帯が通じる状況になったと記憶している。当方も地震の影響で停電は続くし、燃料も不自由で「てんてこ舞い」の状況であった。ラジオで八戸沿岸部が被災したのを知ったのもこの頃であろうか。社員及びその家族の食料、生活必需品、医薬品などの有無、在庫状況を確認した後、支援準備にとりかかった。道路も寸断されているらしく、考えるすべての手を打って、社内対応組と支援対応組のチームに分担することにした。支援チームの物資は、各薬局から手配し調達したが、隊員・物資を運搬する車輻に要する予備のタイヤと燃料がない。どうにかスペアタイヤ4本、軽油予備80ℓを手に入れた。物資が多すぎて、荷物の下に隊員が坐ったままの全くひどい状態で何とか出発させた。ロングボディのワゴン車のスプリングが下がり過ぎ、ヨタヨタと走って行くのを鮮明に思い出すことができる。第1次派遣隊は、難民支援を経験した者を選抜し、経験の為に若い事務担当を随行させた。コーディネーターの指示通り、大船渡市、大槌町、山田町の各地域の主に津波被害を受けなかった孤立した住民のフィールドで活動を行った様である。

第1次派遣隊帰社後、第2次派遣に備え、現地調査のため上記3地域に調査隊を派遣した。刻々と変化する被災地は、調査目的での偵察が重要で、これを行わないと見当外れの支援を行ってしまうからだ。

そうこうしている内に、JMAT青森県医師会が大槌町で大阪・長野のチームと災害医療支援を行っていることを知った。5月より各チームの薬剤師ボランティアが帰郷してしまい薬剤師が途切れてしまう。5月3日より後続をお願いしたいとの連絡があり、連休中ではあるが合流することとした。その後、間断なく弊社チームをJMAT青森県医師会のサポート隊として派遣し、6月8日終了。第10次派遣隊まで支援を継続することとなった。

この支援活動を通じて、隊員達は、自分達の力は、“微力”ではあるけれど“ゼロ”ではないことを認識したようである。平和すぎる生活を送っていることに慣れ過ぎ、いわゆる“平和ボケ”した中で、地獄絵図を目のあたりにし、一回りも二回りも大きくなって来たのを感じた。海の方角を見ながら泣きじゃくる老婆と一晩中付き合った者や、幼稚園でヒマワリを植えてきた者、皆一様に晴れ晴れとした顔と何とも云えない誇らしげな姿を見るにつけ、社長冥利に尽きることであった。今年一月に決定した社内通年スローガン“感動を共有しよう”が全くスムーズに行えた。さらに早朝6時前後の出発の見送り、業務終了後に帰社するチームの出迎えに、「何で？」と思いたくなる程、多数の社員が参加してくれたのも嬉しいことであった。

現在7月13日、一週間程前も希望者で大槌救護所並びに周辺を偵察してきた。これからも継続して行くことになるだろう。いつの日にかまた復興の手助けが円滑に出来るために、岩手県と我々の交流は続いて行くことを確信する。

“義を見てせざるは勇無きなり” “継続は力なり” “最大の敵は無関心”

この3つがすべての社員に植えつけられたに違いない。

蛇足ではあるが、3月19日より6月8日までの支援活動中、一定の成果をあげ、一人の落伍者もなく無事に帰社して来たことは、奇跡としか思えない程の偉業であった。社長として、素晴らしい社員諸君に恵まれたことを誇りに思う。

最後に、今回の被災で亡くなられた地域住民の皆様に心から哀悼の意を表し、被災地の一日も早い復旧、復興を祈念する次第です。

末筆ですが、弊社社員を鍛えて下さった被災地の皆様、岩手県薬剤師会の皆様、JMAT青森県医師会の皆様、昭和大学医療救護隊の皆様、弘前記念病院チームの皆様、そして多くの支援を賜った皆様に衷心より御礼を申し上げます。

（株）町田アンド町田商会
代表取締役 町田容造

2011. 7. 13